

2022-2023年度版刊行に際して

ご存知の方も多いかと思いますが、この本は2年ごとの改訂で発行されています。その改訂作業を行うことは同時に、いつも過去2年間をあらためて振り返ることにもなるのです。社会としても、自分自身としても、この過去2年間はどうかだったのだろうかと……。

人々にはそれぞれの感性や考え方があるということは、いままでの長い人生の中で当然それを感じ、認識しながら生きてきました。しかし、それぞれの立場や役割、生活スタイルなどの違いから、どのような要素や要因がそれぞれの考え方の違いを生じさせているのかを知ることは、私にとってそう容易なことではありませんでした。当然医療に関わっている立場ですので、治療を通してそれぞれの患者さんの感性、考え方を知ることができていたとしても、それはあくまでも病気に見舞われているというシチュエーションの中での話で、その人がいわゆる人生の中ではどうなのであるかと思っています。

しかし、この2年間で世界の多くの人々が、文化や人種を越えて共通の生活体験をせざるを得なくなったのです。まさにそれは新型コロナウイルスというウイルスの影響を実生活の中でかなりのレベルで意識して生きるという苦難な生活を強いられてきたことから始まっています。そして、その大いなる不安と将来を見通すことが困難な状況の中で、マスコミをはじめSNS等を通してさまざまな意見を容易に知ることができるようになり、その影響で対立、差別、偏見、中傷、デマといったことがあらためて人間社会の中で根深く存在しているというグロテスクな実態もクローズアップされてきました。だがしかし、私はその背景には情報というものに対してどのように人々は向き合えば良いのかという点の教育が十分されていないことの影響が大きいとこの2年間の講演活動の中で強く感じるようになってきました。まさにワクチンはその代表的なパターンです。どんなことでもその人にとってその必要性の大きさや利害関係は同じではありません。だから皆が同じことをすれば良いとはならないのです。しかし、その分野の専門家ならともかく、多くはそうでない立場の人ですので、その必要性の大きさや利害関係をどう考えたら良いのかを自分で判断するのが難しいといえます。

今回、そのような気持ちの中で少しでも薬というよく姿の見えない物質を分かりやすく表現しなくてはとより強く思いながら、この改訂作業をした結果、なんと50ページ近くも増えてしまいました。そのため、出版社の編集部、とくに編集長の谷口陽一さんにはいつもと比べて倍以上のご苦勞をかけることになってしまい、本当に申し訳なく思っています。

今回の大きな改訂のポイントは、以下のとおりです。

- ・「新型コロナウイルス感染症治療薬」を、現在、わが国で承認されている薬、ワクチン、およびコロナ用に臨床試験中の既存薬について新しく書きました（総ページ数14）。
- ・「がんの治療薬」について、現在、治療の幅を著しく広げた分子標的薬にページを多く割り当てて最初から書き直しました（総ページ数36）。
- ・その他、「心筋梗塞治療薬」「心不全治療薬」「下痢の治療薬」「全身性エリテマトーデス治療薬」「糖尿病治療薬」「脂質異常症治療薬」「更年期障害治療薬」「腎疾患治療薬」

「うつ病治療薬」「不安・不眠治療薬」「統合失調症治療薬」「頭痛の治療薬」「認知症治療薬（アルツハイマー型）」「抗がん薬の副作用対策薬」「がん性疼痛治療薬」「アトピー性皮膚炎治療薬」「尋常性瘡瘡治療薬」「緑内障・白内障治療薬」「貧血の治療薬」「ニコチン依存症治療薬」「アルコール依存症治療薬」の項目で、新規医薬品の追加およびそれに伴う薬物治療についての最新知見を示しました。

いつものことですが、この本が医療に携わり、日々患者さんのために頑張っておられる方々の一助となることを願いつつ、かつ私自身も前に向かって今後も努力をしていく所存であります。

2022年4月

中原 保裕